

▶学会・研究動向◀

第三回日本中東学会

花見日和のうららかな陽気の中、日本中東学会の今年度大会、総会は、四月四日と五日東京外国語大学で開催された。初日には公開シンポジウムと懇親会が、第二日には、研究発表および総会がおこなわれた。

前大会のパネルディスカッションに替えて、今大会では、「中東の軍人——その過去と現在」のテーマでシンポジウムがおこなわれた。司会は永田雄三（東外大 AA 研）、問題提起者と論題は以下の通りである。

嶋田襄平（中央大）「ムカーティラからマムルークへ」。

鈴木 董（東大東文研）「前近代オスマン帝国における軍人と軍隊の変遷過程」。

加藤 博（東洋大学）「近代軍の編成と中東」。

富田広士（慶応大学）「20世紀中東における軍部の政治介入」。

また、コメンテーターの後藤 明（山形大学）、八尾師誠（東京外大）、木村修三（神戸大）もそれぞれの専門分野に関する発言を行ったが、後藤氏がイスラム初期史における非職業軍人に対する優位性、八尾師氏が、レザー・シャー政権前のイランには職業軍人の指揮する近代的軍隊が事実上存在しなかったことについて述べ、木村氏は三点に及ぶ、すなわち中東軍事政権と他地域のそれとの差異、軍事政権の政策実行の具体的過程、「Islamic legacy」の問題の重要性を指摘した。

狭義の歴史学研究者に加え、政治学者、社会経済学者を交えた齟々たる顔触れであり、筆者も多くの斬新な史実や理論に接した聴衆の一人であった。しかし、これらの知識は、発言者の論文を読んだり、個別に質問することで得ることができる。望蜀の所以を述べれば、当学会のような学際的集会においては、相互の専門的規律や領域設定にかかわる議論が必要である。例えば、7世紀から20世紀まで非歴史的に用いられた「軍人」の語はあらゆる立場から等しく定義された学術上の用語として有効なのだろうか。また運営技術上の面では木村氏の問題提起に対して各分野の研究者がそれに沿って発言するような方法が有益であったのではないとも考えられる。これも技術上のことであるが、もっとも多忙な事実上の事務局長が、いわば本大会の目玉商品であるシンポジウムの司会者も務められるのは、激務に過ぎるように思えた。

パーティーは、川床睦夫（中近東文化センター）の司会により、黒柳恒男（東京外大、実行委員長）、長 幸男（東京外大 学長）の挨拶、乾杯の音頭は小堀 巖（三重大）が

とった。梅棹忠夫会長病氣中のため挨拶が代読された。

会員と会場運営にあたったベルシア語科、アラビア語科学生とで、東京外大会議室は満員の盛況であった。また、その場で、アメリカ合衆国に永住を決意されたアラビスト田村秀治氏の壮行会が行われ、牟田口義郎（成蹊大）が、壮行の辞を述べた。

第二日目、研究発表の発表者、論題は、以下の通り。司会は、第一部会、中村広治郎（東大）、岡崎 正孝（大阪外大）、北川誠一（弘前大）、第二部会、富岡倍雄（神奈川大）、佐藤次高（東大）、板垣雄三（東大）であった。

第一部会

設楽国広（都立千歳高校）「アブデュル＝ハミト2世の蓄財とアゴブ＝バンシャ」。

川本正知（京大、院）「ティムール朝時代のワクフについて」。

藤井守男（東京外大）「イラン近代文学の成立とナショナリズム」。

森川孝典（金沢大）「現代エジプトにおける聖者崇拜」。
林佳世子（東大、院）「『メフメト2世のワクフ文書群』の成立」。

三浦 徹（東大、院）「マムルーク朝末期の官僚と賄賂」。

第二部会

遠山榎雄、若宮和泉、竹内芳親（鳥取大）「高温乾燥条件下におけるムラサキソシンカの光合成・蒸散速度」。
向後紀代美「アラビア湾の真珠産業——とくにインドおよび日本との関係について」。

李 修二（名大、院）「エジプトの農民と外国資本——エジプト農業銀行の発展と衰退（1902-1931）」。

久保田正（三菱原子力工業）「中東の原子力研究——核燃料と材料」。

武藤幸治（JETRO）「JCC 諸国の経済拡大と産業・社会の空洞化」。

近藤久美子「ジャーナーメの詩的語法について」。

シンポジウムの盛況に較べると、二日目の研究発表は、多少参加者が減るのはやむを得ない。しかし、中世、近代史中心の第一部会は、まず十分の参加者がみられたが、非人文系中心の第二部会会場は、寒散としていた由である。今後も、会員に専門家が少ない分野の発表を継続する場合、聴衆を確保するために何等かの手段をこうじる必要がある。我が中東学会は、社会科学人文のみの学会ではないことも特徴だからである。

なお、総会では、梅棹会長以下の人事、予算決算が承認された。また、次期大会、総会は5月上旬仙台宮城学院女子大での開催が決定されている。（北川誠一）